



聖マリア病院ヒストリー



Marmand Joseph Ferdinand
(1849-1912)

①奥浦慈恵院創立者・マルマン神父

聖マリア病院は、奥浦慈恵院内に創設された小さな診療室から始まりました。聖マリア病院の起こりや礎を築いた方々について学びます。最初に取り上げるのは、奥浦慈恵院の創立者であるフランス人宣教師、マルマン神父様です。

マルマン師は、1849年フランス、リヨン市に生まれ、信仰厚い家庭に育った。フランス革命以降、フランス国内では世俗化、近代化、産業化により社会は急激に変化し、それがヨーロッパ中に影響を与えて、19世紀は各地で革命や民族運動が起こる混乱した時代だった。21歳の青年になったマルマンも普仏戦争に志願して神学校在学中に出征したこともあった。

その後、海外への布教を神のみ旨と感じたマルマンは、1875年(明治8年)9月26歳でパリ外国宣教会に入会。父親の涙と説得に直面しなかつた彼は、何も告げずに家出してパリの宣教会本部にやってきた。その時の父親の狂乱ぶりは大変なものだったらしい。父親との和解は困難なものではあったが、マルマンの事を成し遂げるための行動力と意思の強さがうかがえる。

1876年(明治9年)27歳で叙階。同年11月2日、直ちに日本に出発した。明治10年、フレノ師と五島に渡って各地を巡回したが、まずは奥浦村大泊に落ち着いた。大泊にはキリシタンの梅木マセという腕の良い産婆がいた。当時の五島では江戸時代から行われていたいわゆる「間引き」が続いており、貧困家庭の子女、不義の子、障害のある子、双子などが闇から闇へと葬られていた。彼女がマルマン師にこの現実を報告したところ、師は早速こうした不幸な子らの救済に乗り出した。マルマン師の賄いを務めていた浜崎ツイ(奥浦間伏出身・21歳)にそうした子どもたちの世話を依頼し、大泊の一民家を借り受けて養育を開始したのである。1880年(明治13年)のことであった。「大泊子部屋」は2年後、堂崎教会敷地内へと移転され、「養育院」と呼ばれるようになった。また、養育にあたったキリシタンの女性の一部の人たちはマルマン師の指導のもとに、神と隣人への奉仕に献身するため、一生独身を誓って共同生活を営む様式へと移っていった。これがのちの奥浦修道院となる。

1888年、マルマン神父は、伊王島へ転任する。五島での「養育事業」および「修道院」は7年の歳月を経て基礎作りがなされ、これからというときであったが、すべてを後任のペルー師に託して五島を去ったのである。この時マルマン師は38歳、ペルー師は40歳の働き盛りであった。その後マルマン師は、奄美大島、琉球を経て1897年、黒島教会に赴任した。一時フランスへ帰国するが終生黒島で過ごした彼は、1912年(明治45年)、64歳で帰天し黒島教会墓地に埋葬されている。

彼には、一つだけハンディキャップがあったという。それは肥満のために足が悪かったということ。彼は、朝から晩まで長椅子に座り、足を道具箱の上に伸ばしてパイプを吸っていた。周りからはのんびりして、何もしていないかのように見えていたかもしれないが、実は頭の中は常に忙しく、信者のこと、教会の設計のことを考えていた。彼の記憶力は非常に優れていて、約二千人の信者の名前を覚えていたという。教会建築にも才能を発揮し、下五島にいた10年の間に各地に10の教会を建てている。



聖マリア病院ヒストリー



Albert-Charles-Arisene Pelu
(1848~1918)

②奥浦慈恵院・修道院創立期の指導者 ペルー師

マルマン師の後継者は、同じくパリ外国船教会の宣教師、ペルー師です。ペルー氏は修道院と養育事業を引き継ぐだけでなく、精力的に働き、直接指導に当たられました。

ペルー師は、1848年フランスのサルト・フレネーシュルサルトに生まれた。ペルー師が10歳のころ、同じフランス国内のルルドで聖母の御出現があっており、日本の信徒発見のニュースが世界の教会を驚かせたのは17歳の時だった。この2つの神秘的な出来事は、彼の人生に大きな影響を及ぼしている。22歳で司祭に叙階されたペルー師は、翌年パリ外国宣教会に入会。2年後に日本に派遣され、新潟、神戸に赴任。翌1873年に長崎の外海・黒島・平戸島、馬渡島（佐賀県）の運営を任された。1878年には黒島に女部屋（現・黒島修道院）を創立し、平戸の田崎に教会堂と司祭館を建てている。その後、浦上教会主任司祭を経て1887年 マルマン師の後任として堂崎に着任した。39歳の時である。

ペルー師の着任を機に、浦上十字会（現・十字修道院）より浦岡サク、続いて溝口ベンが院長として奥浦に派遣され、養育事業と修道生活の指導にあたった。養育事業はマルマン師時代から信仰篤い協力者に恵まれてきたが、当時の生活水準は低く、キリシタンの生活はなおさらであった。この頃の唯一の現金収入は『機織』で、ほとんど夜なべの仕事になっていたという。養蚕業も始まり、その後43年間、奥浦診療所が開設されるまで生計を支えた。養蚕業が盛んになりだしたころ、ペルー師の勧めで『小間物の行商』が始まった。各地を巡り歩きながら、事情があって家庭で生活できない子どもたちを探し、施設に引きとるため、また養子や里子に出した子どもたちの状況を知るためでもあった。創立のきっかけになった『産婆』の仕事も会員を養成し、昭和49年まで続く事業となった。これらに加え、農耕にも従事して粗食に甘んじ、子どもたちを養い育てたのである。夜中まで機織をしても、朝4時ごろには起床してミサに与り、労働の合間にも祈りの時間が決められていた。ペルー師の霊的指導は厳しく、告白場で時間をかけて個人的に行われていた。

ペルー師は1892年からは五島列島全体の責任を任せられた。1895年 井持浦に教会を建て、5年後には同敷地内に日本で初めての「ルルドの泉」を創設した。また、母親の残した遺産を投じて奥浦の山林を買い求め、修道院と養育院を移転させた。堂崎天主堂の建築計画のためである。山林の開墾作業は会員とその家族も加わって行われ、ペルー師は、毎日堂崎の司祭館から通って一緒に汗を流し、工事の指導、現場監督を務めた。1904年 養育院新築落成、1908年には堂崎天主堂が完成した。同年、福江市内に教会の建設用地を購入している。1914年から体調を崩し、休養を繰り返したが、1918年に長崎で帰天。クザン司教の傍らに眠っている。

ペルー師は信仰の面では厳しかったが、愛情があり、信者たちからは「ペルさま」と慕われていた。頑健な肉体と皆をまとめる組織力の持ち主で、櫓船に乗って島から島へと宣教司牧した。30年間にわたって、五島に地に大きな遺産を与えてくれた恩人である。



聖マリア病院ヒストリー



③明治の日本とパリ外国宣教会（前編）

聖マリア病院とは直接関係はありませんが、マルマン師やペルー師など、明治の日本の教会再生に尽くしたパリ外国宣教会の宣教師たちと彼らが出会った明治のキリシタンについて時代背景も含めて学びます。

大航海時代、アジア、中南米に渡って宣教したのは、イエズス会やドミニコ会など修道会の宣教師たちだった。修道会は国王と結びつき、保護されながら宣教を続けてきた。そのため、どうしても自国の益や、政治的事情の影響を受けることも多く、教皇の意向、教会のための宣教活動が難しかった。ベトナムで宣教活動をしていたイエズス会司祭、アレクサンドロ・ド・ロードは様々な困難や迫害を経験しながら、法人の司祭、司教の養成の必要を強く感じ、ローマに教皇に進言する。教皇の意向も同様に、1663年、海外の宣教地で教会を設立し、現地人司祭を育成することを目的にパリ外国宣教会が設立された。修道会ではなく、有志の教区司祭で結成された海外宣教グループである。

会員は本国を出発する際、次の3つの約束をする。第1は、一生涯をそこで終わること。あたらしい文化や生活習慣を身につけることは、数年でできることではない。生涯をかけて、その国の歴史や文化を学ぶことから始める。第2は、教師のように福音を教えるのではなく、人々の中に入って彼らから学ぶ姿勢を持つこと。宣教地の文化(言語、食べ物、生活習慣)を自分たちの生活に取り入れ、対決でなく、対話を通じて福音を語ること。第3は、政治とは関わらないこと。政治に無関心というのではなく、司祭の立場を利用して特定の為政者とつながらないことである。

パリ外国船教会の宣教師は、1859年にフランスの外交使節団の通訳として日本に入国を果たしている。前年に日米修好通商条約が締結され、貿易が始まったばかりのことである。1865年、長崎浦上の信者とパリ外国宣教会の司祭が出会う「信徒発見」が起こる。開国はしたものの禁教は解かれていない状態で、神父は信者の司牧活動を秘かに開始していった。

しかし、その活動は同地の信徒の弾圧を招くことになる。信徒発見から2年後、浦上の信徒たちは寺とは縁を切りたいと公然と信仰を表すことになった。江戸幕府は、厳しい拷問によって改宗をせまる。この問題は、諸外国から批判を受けたが、根本的な解決を見ないまま、1868年に明治新政府が発足。それでも弾圧は続き、浦上のおもだった信者114名が津和野に流罪となり、段階的に浦上村のすべての信者3414名が、鹿児島、広島、岡山、金沢など21藩に流され、牢に入れられ拷問を受けた。全国に流された信者のうち、336名が殉教者となった。浦上の信者たちはこのことを『旅』として語り継いでいる。



聖マリア病院ヒストリー



④明治の日本とパリ外国宣教会（後編）

日本中で起こるキリシタン弾圧の嵐。キリシタン禁制の高札が下りた後でも久賀島では殉教がありました。大きな迫害あとに、パリ外国船教会の宣教師たちはどのように信徒たちにかかわっていったのでしょうか。

五島でもキリシタンたちが信仰を表明したため、弾圧がはじまった。久賀島では、わずか6坪の牢屋に約200人が収容された。立ったまま押し込められて雨戸を閉め切られ、多くは人の体にせり上げられて足が地に着かない。まず老人、子どもから次々に死んでいった。人間としての尊厳は皆無の悲惨な状況の中で、大人も子どもも、何より大切な信仰を捨てるとは言わなかった。迫害は五島列島全体で行われた。信者たちは牢に入れられ、拷問を受け、村を追い出され、家財道具を略奪され、土地を奪われる者もあった。

近代国家として発足した明治政府の下で、このような残酷な出来事が行われたことを知る人は少ない。徳川幕府が250年間あらゆる方法で国民の頭に植え付けた「キリシタンは邪教だ」という考えが五島の人々にもあったこと、信者たちは大村藩外海からの移住者で、山間僻地に住まい、元々住んでいた人々に軽蔑されていたことが迫害をエスカレートさせた要因と言われる。諸外国の反発を受け、1873年キリシタン禁制の高札は取り下ろされ、迫害は終わった。

パリ外国宣教会の神父たちが再宣教で出会ったのは、身体的にも精神的にも大きな傷を負い、貧しく生きる信仰深い信者たちだったのである。神父たちにとっての第一の課題は彼らに自身と勇気、希望を与えることだった。マルマン神父とペルー神父は、彼らを励まし、早く迫害の苦痛を忘れるよう祈り、働いた。

本来、パリ外国宣教会の目的は宣教であり、施設は創設しないのが原則である。しかし宣教師たちにとっては、当時の人々に必要だったものは養育院であり伝道学校だった。信者たちはカトリック信者としてのアイデンティティを必要としていた。神父たちは各地に教会を建て、ミサを行い、公教要理を教え、カトリック信者としての自信を持たせたのである。宣教師たちの手足となって働いた女性たちは、迫害を受けた人であり、『旅』に出て、一度は殉教を覚悟した人々だった。





聖マリア病院ヒストリー



出口 一太郎 師



浜崎 タカ

⑤三代目主任司祭、出口師と事業の改革

堂崎教会にとっての初の法人司祭、出口神父様が取り組まれた事業の改革、専門職の人材育成のお話です。

ペルー氏の後任として、大正7年2月、出口一太郎師が3代目の主任司祭となった。下五島に日本人最初の主任司祭が誕生したのである。出口師は、1920(大正9)年2月、堂崎伝道学校を卒業した木口マツに、奥浦修道院への入会を勧めた。入会したマツは、4月より五島高等女学校に編入、小学校の准訓導の資格を取り2年後に卒業すると、その年の10月、埼玉県社会事業職員養成所で3ヶ月の研修を受けた。研修では社会問題、児童保護感化教育、防貧事業、救済事業、基礎科学一般の講義を受けた。出口師は養育事業をこれからの時代に向けて発展させるため、事業内容の充実と制度を確立させようとの計画に基づき、人材を集め養成を始めたのである。出口師の指導のもと、木口マツは養育と修道院の合理化を目指して改革をすすめた。修道院の日課が定められ、祈りと労働と勉強の時間が配分された。また、会員の石山スエを長崎医科大学の信者の小児科医に託し、保母としての訓練を受けさせた。

慈恵院に収容されている子どもたちは、病気がちな子どもが多かった。会員たちは毎日のように対岸の檜ノ浦の江口医院まで櫓をこいで通院した。人々からは「カラスの鳴かん日はあっても、慈恵院のもののこん日はなか…」と言われるほどであったが、看病をしても短い命を終える子どもも多く、心を痛めていた。会員の中から医師、看護婦の養成の必要性を考えていた出口師は、1926年(大正15)年、堂崎伝道学校卒業を目前にした浜端タカ(入会后、浜崎性となる)に入会を勧め、静岡の不二女学校に通わせ医師を目指させた。早速、医師養成のための資金作りがはじめられた。1928(昭和3)年3月、浜崎ソメが助産婦の資格を取得すると、石山スエと共に、福江教会の敷地内に助産院を開業させた。敷地内には精米所があったが、出口師はペルー師の遺産を投じてこれを買ひ受け、翌年3月に精米所を開業させた。慈恵院から5名の会員が派遣されて、奥浦慈恵院福江分院が設立された。精米所は、女性にとって大変な重労働であったが、評判が良く繁盛し多くの収入をあげた。

昭和5年2月、浜崎タカは東京女子医専に合格し、本格的に医学の勉強に励んだ。昭和10年、27歳のとき女子医専を卒業、それと同時に奥浦に帰り、実習のため福江の公立五島病院に1年間勤務した。翌昭和11年12月25日、奥浦診療所を開設。この診療所は奥浦慈恵院に付属している一室を改造したものであった。出口師が計画した修道者としての医師養成は約10年目に実現したのである。のちに出口師は司教となり、鹿児島での司牧にあたられたが、奥浦慈恵院のことを尋ねられた際、「会員が犠牲と一致の精神を持って励むならば、同会の事業は必ず祝福されるでしょう。」と述べている。



聖マリア病院ヒストリー



⑥奥浦慈恵院 福江分院

奥浦修道院の分院として福江に共同体ができました。現在の福江修道院の起こりです。

昭和3年3月2日、浜崎ソメが福江町で助産婦を開業した。彼女は、私立福江産婆学校を昭和2年3月に卒業し、昭和3年10月、長崎に於ける産婆試験に合格、免許を取得していた。この家の敷地内には、旧福江教会、司祭館、賄い部屋などがあり、その上の屋敷には、製麺、製粉精米工場があった。

昭和4年3月、修道院はこの工場をペルー師の遺産をもとに買い受け、開業した。これを機に、木口マツが院長となり、他の4人と共に精米業を営み、浜崎ソメ、石山スエは助産婦として働く7名の新しい共同体ができた。これが「奥浦慈恵院分院」である。

精米業は、医師養成費、養育事業の補助事業として始められたが、注文が多く、深夜徹夜の作業が続く事があった。また、女性の身には重労働で、怪我もつきものだった。会員たちは、一日中機会の騒音の中で、身を粉にして犠牲を捧げたのである。

精米業が始められた年、早坂司教様の巡察があり、この現場にも立ち寄られたが、修道女であること、会員たちがキリストのあかしとなるよう自覚するためにも、一定の制服を着るよう勧められた。会員たちは仕事の時は、その当時の世間一般の婦人たちと全く同じもの、三巾前掛と衿なしの上衣を着ていたからである。作業着は木綿の水色生地、ヘチマ衿のワンピースとなった。

昭和11年に開設された奥浦慈恵院診療所は、昭和18年には二代目の医師となった浜崎ミサヲが診療に加わった。昭和23年9月、福江町松山に移転し、聖マリア診療所を開設、浜崎タカが病院長となった。第二次世界大戦以来、医師が少なくなり、全五島から集まる患者に対応できず、ベッド数は、最初の9床から29床に増設され、昭和30年3月25日、99床を備えて病院として認可され「聖マリア病院」へと発展していく。

昭和4年に始まった精米業は、聖マリア病院認可とともに閉鎖され、医療事業への充実を図ることになった。





聖マリア病院ヒストリー



⑦在俗修道会「聖婢姉妹会」へ統合

長崎各地に創立された修道院(女部屋)は小教区の主任司祭の下で各々独立して活動していましたが、教会法に基づく修道会ではありませんでした。山口司教様は在俗修道会として統合することを計画され、奥浦慈恵院から独立したばかりの福江修道院もこの変化の波にのまれるように新しい時代へと進んでいきます。

1955(昭和30)年、聖マリア病院を開業した年に奥浦慈恵院福江分院は、奥浦慈恵院から分離独立し、福江修道院となった。5月27日に奥浦診療所を閉じ、そこで診療を続けていた浜崎ミサヲと数名の会員が聖マリア病院のスタッフに加わった。福江修道院は18名の共同体としてスタートした。

ところで、パリ外国宣教会の司祭たちによって創立された出津、浦上、奥浦、黒島、田崎、鯛の浦、仲知など九州各地の13の共同体に加え、その後も長崎教区司祭によって田平、上神崎、神の島、大山、西木場、平戸、青砂が浦、三井楽、桐、久賀などにも教会に奉仕するための修道院が設立された。これらの会の会員は、正式に誓願を宣立していなかったが、司祭の指導のもと私的誓願を宣立しており、共同体は一般に『女部屋』と言われていた。

1927(昭和2)年に初の邦人司教が誕生したときから『女部屋』を統合し正式な誓願宣立の修道会とすることは、考えられていたようだが、その見極めのためにはしばらくの時間が必要であった。「彼女らは、ゆっくり、だがしっかりと誓願宣立の修道会へと向かっている」という当時の早坂司教のことが残っている。1947(昭和22)年、長崎教区長となった山口愛次郎大司教は長崎各地に散在する『女部屋』を巡察するため里脇浅次郎師を派遣した。師は修道院の実体を見聞する一方、真の修道生活について、奉獻生活について講話をし、姉妹たちを励ました。

それから約10年後の1956(昭和31)年5月、山口司教は各修道院に通達を出し、統合の意思を確認し、一つの修道会となるために、会憲の整備、再教育のための修練の必要を説かれ、指導司祭に野原清師を任命した。同年11月、24の共同体が一つとなり、長崎教区立在俗修道会「聖婢姉妹会」として承認された。統合の目的の第一は修道精神の充実で第二は教会のためによりよく奉仕することである。大浦天主堂境内の修練院で11月から修練が開始された。最初のグループは院長たちで、奥浦からは木口マツ、福江からは浜崎マツが参加している。5ヶ月の修練の後、誓願式が行われ、二人は他の姉妹とともに大浦天主堂の信徒発見の聖母マリア像の前で初誓願宣立の恵みにあずかった。こうして聖婢姉妹会福江修道院としての歩みが始まった。





聖マリア病院ヒストリー



山口愛次郎大司教



里脇浅次郎枢機卿

⑧お告げのマリア修道会の誕生

明治の初めに、宣教師に仕えたキリシタン女性たちの集まりは、時間をかけ、形を変えながら少しずつ成熟し、ついに正式な修道会として歩みだすこととなります。そのためには、多くの人の助けがありました。

1969(昭和44)年3月、山口大司教の後任として里脇浅次郎師が長崎大司教区の教区長となった。大司教は、聖婢姉妹会の歩みを導き、着任から6年の歳月をかけて会憲の整備と、修道会としてローマ教皇庁の認可申請のための法的な手続きを進め、ついに1975(昭和50)年3月25日、聖婢姉妹会は、お告げのマリア修道会と名前を改め、正式修道会として発足した。師は、「これは、長い間の私の念願であり、聖座から託された任務の一つでした。」と設立認可の喜びを語っている。

同年10月19日、一斉に修道服を着用し、それぞれの小教区で親族を招いて着衣を祝った。時代は第二バチカン公会議後で、多くの修道会は中世からの伝統的な修道服のスタイルを簡素なものへと移行し、修道服そのものを取りやめる動きがあった。会員たちも修道服の着用については大半が不賛成だった。里脇大司教は、会員の身分を保証し、生活を守るために修道服の着用を勧め、思案する会員たちに、内面を深めると同時に、外面を整える必要があることを諭された。

1979(昭和54)年、里脇大司教は枢機卿に親任された。抱負を尋ねられると、「抱負などと言う、大それたものは別にありませんね。」と気負った様子もなく答えたという。「私たちのつとめは、キリストさまがおっしゃったように、仕えられることではなく、人びとに仕えることなんです。どうしたら、人びとにキリストさまの精神がわかってもらえるかをいつも考え、社会に奉仕していきたいものです。」

里脇枢機卿は、お告げのマリア修道会の会員たちにしばしば講話をし、励ましの言葉を残している。「揺れ動く教会と、激動する社会情勢のただ中であって、信仰に固く踏みとどまり、神のお告げを受けられたおとめマリアのように、潔い心を保ち、神への全き信頼と深い謙遜を身につけるように。信仰教育と福音宣教への熱意と忠実さを保ち、神とその教会にふさわしい奉仕ができるよう、よく祈り、熱心に励むように。お告げのマリア会の使命は教会の母マリアの使命を生きることです。マリアに似るものとなってください。司祭たちを助けてください。そして牧者の協力者、信仰のよき導き手となれるように、学びつとめてください。殉教者の子孫である誇りを失うことなく、召されたものの喜びを失うことなく、しっかりとした信仰の証し人となってください。」未熟なものを相手に、大きな期待を込めた言葉の数々は、復活のキリストが弟子たちに残した言葉を思い起こさせる。

長年、聖マリア病院の担い手であった浜崎タカは、お告げのマリア修道会正式認可の年である1975年1月25日、悪性黒色腫のため帰天した。65歳だった。福江修道院は、8月に修道院の新築工事に着工していた。

Congregation of Mary of the annunciation



聖マリア病院ヒストリー



番外編 ～Sさんのお話し～

昭和 19 年からしばらくの間、浜崎タカは岐宿診療所に勤めたことがありました。Sさんの子どもの頃の記憶のなかに、若い女医の浜崎タカの面影が残っていました。Sさんが語ってくれたお話しです。

私の両親は、毎日田畑の仕事が忙しく、私たちは祖父や祖母によくかわいがってもらいました。5歳年上の兄が長崎の師範学校に入学するときも、祖父がついて行ったぐらいです。

時代は第二次世界大戦のただ中でした。8月9日、長崎に原爆が落ちたと聞きましたが、兄とは数日連絡が取れず、家族はみんなあきらめていました。そんな兄が家に帰ってきたのです。家族はうれしいよりもびっくりして、祖母は「生あるもんか？(ちゃんと生きているのか)」と大声を出したぐらいです。幽霊だと思ったのでしょう。兄は、友達数人と、原爆で負傷した三井楽の同級生の肩を支えて戻ってきたこと、船が福江には停まらなかったの、山超えて帰ってきたことを説明しました。そんな兄の様子が、翌日からおかしくなりました。洗面器2杯分の水様物を嘔吐し、高熱を出して床に臥せるようになったのです。頭からは湯気みたいにモクモクしたものが出来、髪の毛も抜け出しました。原爆の後遺症だったのでしょう。稲刈りの忙しい時期でもあり、両親は仕事があるので、私が兄の横にいて、熱さましの手拭いを洗って替えてやったりしていました。祖父は心配して、兄の様子を何度も見に来ていました。

そのとき、兄の往診に来てくれたのが、岐宿診療所にいた女医さんでした。まだ若かったと思います。祖父は、その女医さんに「どうか助けてください」と何度も畳に頭を擦り付けて懇願していました。わたしはその光景を忘れることができません。女医さんは、それから2～3回来てくれたと思います。何がよかったのかは分かりませんが、兄はその後、元気になって、90歳で亡くなるまで大きな病気にかかることもありませんでした。兄自身が女医さんの事を覚えているかは分かりませんでしたが、祖父はずっと「あの先生は命の恩人だ」と感謝していました。兄の事があって、しばらくして福江に聖マリア病院ができて、あの先生はそこにいると聞いていました。

もう70年以上前の話ですが、今回縁あってこの病院に来て、あの先生の事を確かめることができよかったです。甥や姪にも話しておこうと思っています。





聖マリア病院ヒストリー



Sr 長谷川スナ子

番外編 ～入職当時のこと～

長年聖マリア病院の職員として勤めておられる、事務長のシスター長谷川が入職した当時のお話しです。

はじめまして!!私は聖マリア病院に54年間もお世話になっています。先日、お告げのマリア修道会の総会が行われ、修道会創立期の会員の生き方を探りました。総会后、「マリアの風」の担当者から、聖マリア病院の古い時期を知るのは私だけという事で、入職時の状況を書くように依頼されました。そこで、昭和42年3月入職時から昭和53年4月お告げのマリア修道会による開設時までを辿ることにしました。

私が入職した頃、病院長は浜崎孝子でした。医者は孝子院長とミサヲ先生、時々来られる非常勤の医師だけだったと思います。許可病床も入院患者も現在と同じくらいで医師は2名だったので、レセプトを見て貰うのにとても苦労しました。医師の方が、もっと大変だったと思います。昭和45年1月に前院長の梅木公子、昭和48年5月に川端睦が入職し、やっと4名の医師体制になりました。病棟は2人制の宿直でしたが、1人は看護師以外の私たちでした。私たちは外来の掃除や暖房用の炭火の用意、カルテに熱等の記入をしていました。看護師は11名位でした。病床は一般63床、結核36床だったので、大変だったと思います。

全職員で45人ぐらいでしたので、歓送迎遠足やルルドの桜見など楽しいこともありました。事務長のシスター赤尾ミトが昭和48年11月に、孝子院長が昭和50年11月に帰天しましたので、昭和48年にシスター大川マス子が事務長を、昭和50年にミサヲ先生が院長を継ぎました。そして、昭和53年4月にはシスター松永マサ子が入職しました。

建物ですが、入職の頃、本館の増設工事をしていました。診療棟、西病棟、給食棟がありました。診療棟と本館の繋ぎ目の部分の雨漏りに悩まされていました。繋ぎ目の所が階段になっていたため、滑って、骨折したシスターもいました。2000年7月に新築落成した現在の建物は、先人方の苦労の賜物だと思います。先人方は、修道会がまだ正式に認可されていない時代の奉獻生活者でした。奉獻生活の意味も、あまりよく理解できないまま、ただひたすらに、自分が信じるお方に、黙々と日毎の十字架をお捧げして生きたのだと思います。先人方や共働者のご苦労に、心からの感謝の祈りを捧げます。



令和3年3月1日(入職記念日に)